

学習意欲を高める社会科授業の研究

— 6 年の実践をもとにして —

村上 和光・本蔵 毅*

Teaching Approaches to Improve the Learning Will of Children for Social Studies : Through Teaching Practices in the Sixth Grade

Kazumitsu MURAKAMI・Tsuyoshi HONZO

I. 研究主題設定の理由

新指導要録では、「新しい学力観」に立つ評価を行うように、全教科とも「関心・意欲・態度」が評価観点項目のトップに上げられている。

社会科においても、以下のように新指導要録と旧指導要録との違いがはっきりと示されている。

- 新
- | |
|--------------------|
| 1. 社会的事象への関心・意欲・態度 |
| 2. 社会的な思考・判断 |
| 3. 観察・資料活用の技能・表現 |
| 4. 社会的事象に付いての知識・理解 |

- 旧
- | |
|-------------------|
| 1. 知識・理解 |
| 2. 観察・資料活用の能力 |
| 3. 社会的思考・判断 |
| 4. 社会的事象に対する関心・態度 |

「新」と「旧」では1～4の順が逆になっており、しかも「新」では「関心・態度」の項目に「意欲」が加わっているのである。

これは、新学習指導要領の第1章総則に、学校の教育活動の目標として「自ら学ぶ意欲と社会の変化に主体的に対応できる能力の育成」と明記されていることを受けての評価観である。

これまでの小学校社会科においては、社会科を研究・実践されている方は別として、どちらかと言えば、「知識・理解」を重要視し、学習内容をどれだけ「知っている」か、どれだけ「理解している」かを主として評価していたように思う。そのため、いかにして「知識・理解」に至ったかという学習過程についてはそれほど問題されず、「知識・理解」重視の注入型社会科学学習が行われ、「社会科は暗記もの」という考え方が一般的であったように思う。

しかし、これからの社会科では「自ら学ぶ意欲（＝学習意欲）」を最も大切なものとし、その意欲を持続させながら、「思考力・判断力・表現力」などの能力を育て、それらの能力を用いながら、自らの手で「知識・理解」を獲得するというような学習を行うように求められていると考えるのである。¹⁾

では、なぜ今「自ら学ぶ意欲」を最も大切にしたい学習が求められているのであろうか。端的に言えば、今の子どもは学習を積極的に行おうとする意欲を十分に持てないでいるからである、と考える。

社会は急激に変化している。産業構造の変化、情報化、国際化、価値観の多様化、核家族化、高齢化などこれまでにない速さで変化し続けているのである。²⁾ このような社会の変化に主体的に対応していかなければならない。そのためには、自分から積極的に学習していく意欲が何

よりも必要なものであると考える。

それにもかかわらず、今の子どもは「自ら学ぶ意欲」を十分に持てないでいるのである。「指示待ち」という言葉に代表されているように、授業中の子どもは、受け身で、何か指示されるまで、学習らしきものは何もせずに待ち、指示されたことのみを行い、それが終わると、また次の指示を待つという実態が見受けられるのである。

このような子どもの実態に疑問を持ち、少しでも多くの子どもが意欲的に学習するようになって欲しいという願いと、そのためには、どのように指導したらよいかという問題意識から、「学習意欲を高める社会科授業の研究」という研究主題を設定したのである。

Ⅱ. 研究内容

1. 研究仮説

子どもの学習意欲を高めるには、どのようにしたらよいのだろうか。

子どもは、おもしろいと思ったら、ひとりでに動き出すものである。³⁾ ときには長時間熱中しなかなかやめようとしなないこともある。例えば、テレビゲームに熱中する子どもなどである。

授業においても、このように子どもが熱中し、なかなかやめようとしなないことがある。例えば、水泳の授業である。

6限目に水泳の授業を行ったときなど、もう授業が終わる頃になると、次に授業がないこともあって、時間を延長するように何度も要求される。会議などがなければよいが、あるときは延長できず、子どもは非常に残念がる。それほど子どもにとっては、水泳の授業というものがおもしろくて、魅力的なのであろう。

このようなことから、子どもにおもしろいと思わせることが大切なのではないかと考えるのである。

しかしながら、子どもは「熱しやすく、さめやすい」とも言われている。

例えば、授業の導入で、子どもの興味・関心を引くために、何か「モノ」を提示したとする。「おもしろい」と思った子どもは、初めのうちは意欲的に学習しようとする。このことは、非常に大切なことだと思っている。しかし、その後の過程が十分に構成されていないと、子どもの意欲は低下していつてしまう。

また、これまで、どちらかと言うと教師主導の受け身な授業を受けてきた子どもは、意欲的に、自分から進んで学習しようとしても、どのようにしたらよいかわからないという実態もある。

以上のような子どもの特質を考慮し、次のような3つの点に留意すれば、子どもの学習意欲は高まるのではないかと考えた。

- (1) 子どもがおもしろいと思う教材を開発する
- (2) 子どもの意欲が持続するように授業過程を工夫する
- (3) 子どもが学習の仕方を身につけるような指導を行う

2. 仮説に対する考え方と実践例

- (1) 子どもがおもしろいと思う教材を開発することについて

子どもがおもしろいと思う教材はどんなものであろうか。

例えば、「武士が力をもってきた世の中①（平安末～鎌倉時代）」の学習で「頼朝の手紙」をよりどころにした教材がある。⁴⁾

石橋山の戦いに敗れた頼朝は、5～6人の家来とともに舟で安房へ渡る。そこで頼朝は、「自分に味方すれば土地の心配はいらない」という内容の手紙を関東の武士たちに送ったとされている。

途端に家来数は27,000人に膨れ上がり、鎌倉に入るところには30,000人を越える人数になったということである。

子どもは、短期間で「5～6人」という数が「30,000人」という数に増大していることに驚き、「どうしてだろう。調べてみたい」と問題意識を持ち、意欲的に追究していこうとするのである。

また、「武士が力をもってきた世の中②（室町時代）」の学習における「金閣寺と銀閣寺」を比べた教材⁵⁾では、「金閣寺と銀閣寺のどちらに住みたいか」という学習問題から授業がスタートする。金閣寺派と銀閣寺派に分かれて討論が始まる。話し合っているうちに、金閣寺、銀閣寺それぞれの特徴に気づき、さらに今に息づく室町文化のよさに気づくというものである。（この教材の実践については、後に詳しく述べる。）

もう一つ、「士農工商の世の中②（江戸時代）」の学習では、地域教材として「加賀藩の大名行列」を取り上げた教材がある。⁶⁾これは、身近な地域素材を教材として取り上げることによって、子どもと教材を引き寄せ、興味・関心を高めることをねらったものである。

それだけでなく、この教材は次の点でもたいへんおもしろい。

加賀藩の大名行列は人数が2,000～3,000人。大名行列の長さが約4 km。大名行列の経費が今のお金でいうと8～9億円。など子どもが興味・関心を引く事実が含まれているのである。

「どうして、こんなに人とお金を使ってまでして大名行列をしたのだろう」という問題意識を持ち、徳川幕府と加賀藩の関係のみならず、加賀藩の武士と農民の関係まで追究していくことになる。しかもこの関係は、加賀藩だけのことではなく、全国的に共通した関係であることに気づいていくのである。

以上のような例をもとに、子どもがおもしろいと思う教材を開発するには次の3つの観点で行えばよいのではないかと考える。⁷⁾

- ① 意外性があるもの
- ② 新しい発見があるもの
- ③ 拮抗があるもの

(2) 子どもの意欲が持続するように授業過程を工夫することについて

前述したように子どもは「熱しやすく、さめやすい」と言われている。導入を工夫して、学習意欲を持たせても、その後の過程が十分に構成されていないと、子どもの意欲はだんだん低下してきてしまう。

そこで、子どもの意欲が持続するような授業過程の工夫が必要となる。

私は、次の5つの観点に注目して授業過程を構成すればよいと考えている。

- ① 導入で子どもが興味・関心を持つような「モノ」を提示する場を設定する
- ② 子どもが問題意識を持ち学習問題ができる場を設定する
- ③ 子どもの意識の流れにそうように構成する
- ④ 多様な学習活動を行う場を設定する
- ⑤ 学習のまとめとしての表現の場を設定する

① 導入で子どもが興味・関心を持つような「モノ」を指示する場を設定することについて

子どもが興味・関心を持ち、「調べてみよう」などと意欲的に学習に取り組んでいく。導入においては、そのようになるための工夫が必要である。導入で意欲的に学習に取り組むようにしなければ、その後の学習がどうしても受け身になりがちで、主体的な姿を見ることは難しい。

やはり、導入で学習意欲を持つようにしなければならないのである。

(1)で、子どもが学習意欲を持つようにするためには、子どもがおもしろいと思う教材を開発

すればよいと述べたが、その際に、子どもが興味・関心を持ち、おもしろいと思う「モノ」を捜し出すことがポイントになる。

「モノ」とは、実物資料・絵・写真・地図・統計資料・文意資料など教室に持ち込んで、子どもに提示するもののことである。

前述したように「モノ」を提示しただけで、その後の過程が十分に工夫されていなければ、子どもの意欲は低下してしまうが、最初に意欲を持たないことには始まらない。「モノ」を提示するだけではいけないが、やはり最初に「モノ」を提示して、子どもが意欲を持つようにすることが大切であると考ええる。

例えば、箱の中に石斧を入れて教室に入る。子どもは「箱の中に何が入っているのだろう」と興味・関心を寄せる。

そこで、石斧を取り出す。子どもは石斧を見て、「何だろう」「ただの石ではないな」「人間が削った跡がある」などの考えを述べる。

石斧（石の斧）であることを子どもに伝える。子どもは、石の斧であることがわかり、「どうやって作ったのだろう」「どんなふうに使ったのだろう」といった問題意識を持ち、意欲的に追究していこうとするのである。

このように、導入で「モノ」を提示すると、子どもを意欲的にさせることができるのである。

② 子どもが問題意識を待ち学習問題ができる場を設定するということについて

何度も繰り返すが、導入で「モノ」を提示し「おもしろそうだ」と興味・関心を抱かせることは、非常に重要なことであるが、それだけでは、子どもの学習意欲はだんだん低下してくる。「なぜ?」「どうして?」といった問題意識を持たなければ、学習意欲を持続させることは難しい。

「モノ」を提示して、学習に興味・関心を抱かせ、しかも問題意識を持つように子どもに働きかけなければならない。

そこで、私は、「モノ」の提示の仕方や子どもへの語りかけを工夫することによって問題意

識を持つように試みた。

例えば「奈良の大仏」の学習では次のように行った。

まず、模造紙にかいた実物大の「大仏の手のひら」を学習室（空教室を利用した部屋で机や椅子などの物は何も置いてない部屋）に広げておいた。

次に、その部屋に子どもを連れて行き、「大仏の手のひら」の上に乗るように指示する。紙にかいた手のひらであるため、全員が乗ることができる。

子どもから

「大きいな」

「どうしてこんな大きなものを作ったのだろう。」

という感想が出てきた。

その感想をもとに学習問題ができあがった。
〈聖武天皇はどのようにしてこんな大きな大仏を作ったのだろう〉

この学習問題をもとに追究が始まったのである。

そして、病気・ひでり・洪水などで人々が苦しんでいたこと、聖武天皇はそんな世の中を仏教の力で治めようとして大仏を作らせたこと、そのため、のべ260万人もの人々が大仏作りに従事したが、人々の苦しみは一向に減らなかったことなどを調べていった。

この「奈良の大仏」の実践では、「大仏の手のひら」を教室でない別の部屋に置いてあったことがブラックボックス的な効果があったこと、その上に実際に乗せることで大きさが実感できたこと、学習問題を作らせたことで問題意識を明確にしたことが、以後の追究につながったものと考ええる。

③ 子どもの意識の流れにそうように構成することについて

授業中の子どもが受け身であることの原因の一つとして、授業過程が子どもの意識の流れにそっていないからということが上げられる。

学習活動と学習活動とのつながりが薄く、次

の見通しが立たないので、子どもが受け身になってしまうのである。

受け身な態度で、次に先生は何を言うのだろうという学習を行っているため、なかなか学習意欲が高まらないのである。

つまり、学習意欲を高めるためには、子どもの意識の流れにそうように学習活動と学習活動をつなげていかなければならないのである。

縄文時代の学習を例にしよう。

「縄文時代の人々はどんなくらしをしていたのでしょうか。衣・食・住にわけて調べましょう」と発問し、調べさせた後で「衣・食・住」ごとに発表させた場合、新しい事柄ばかりであるので、調べる段階では意欲的に取り組むが、発表の段階では、だんだん学習意欲が低下してくることがある。

このような学習では、子どもの問題意識が薄い。何のために調べ、発表するのかわからず、調べなさいと言われたから調べ、発表しなさいと言われたから発表するのである。しかも「どんなものを着ていたか」「どんなものを食べていたか」「どんな家に住んでいたか」というつながりのない発表が行われる。これらの発表の後、学習活動がどうなっていくのか、どうしたらいいのかわからない。

したがって、学習意欲が低下してしまうのである。

では、どのような授業過程にすればよいのだろうか。

まだまだ十分ではないが、私は次のように行った。

まず、縄文人の平均寿命を問い、予想させた。現代人は75～80歳ぐらいであると補足した。子どもの多くは50～60歳ぐらいであると予想した。

次に、実は31歳ぐらいであることを教えた。

「えっ」

という驚きの声が上がった。

そこで、

「何が『えっ』なの」

と「えっ」の中身をたずねた。すると、

「縄文人の平均寿命がとても短いのに驚いた」と答え、

「どうしてこんなに短いのか」

という疑問が持ち上がった。「えっ」という驚きの声が、「どうしてこんなに短いのか」という疑問に発展したのである。

ここで子どもはまた考えた。

そして、「飢え・病気・けが」などの原因を予想した。

「どうしてそう考えるのか」

と問うと、子どもは

「えものをとるときにけがをした」

「病気になっても医者がいなかったの、なおらなかった。」

などの考えを述べた。

「本当にそうなのか調べてみよう」

「その前に、自分が調べることを問題の形にしよう」

と指示した。すると、

「縄文人はどんなものを食べていたのか」

「縄文人はどうやって食べ物を取っていたのか」

「縄文人はどんなくらしをしていたのか」

などの問題が出された。そこで、共通の学習問題を作らせるために、次のように指示した。

「この中で全体をまとめているのはどれ？それをもとに大きな問題（学習問題）を作ってみよう」

その後話し合いながらできた学習問題は、

〈こんなに平均寿命が短い縄文人はどんなくらしをしていたのか〉

というものである。

この学習問題を念頭に（学習問題はノートに書かせた）それぞれの追究が始まっていったのである。

「どんなくらし」という同様の問いでも、子どもの意識の流れにそってできた問いとそうではなくて教師が一方的に与えた問いとでは、以後の追究に大きな違いがでてくる。

前者の問いをもとに追究していった子どもは

「何十種類という食べ物」「石器や骨角器を使つての猟の仕方」「竪穴住居でのくらし」「縄文土器の作り方」など、様々な本から調べだし、発表していた。

このような学習活動をしていくうちに、「何十種類という豊富な食べ物」と「縄文人の骨にあった飢餓曲線」という一見矛盾した事実がわかり、新たな問題が生まれた。

〈たくさんの種類の食べ物があつたのにどうして何度も飢えていたのか〉

この学習問題をもとにさらに追究していったのである。

このように一つの問題を追究していくとまた新たな問題が生まれ、また追究していくという具合に学習が進められていく。このような問題と問題をつないでいく学習だからこそ、子どもの意識の流れにそのような授業過程になり、子どもの学習意欲が持続し、高まっていくものと考ええる。

④ 多様な学習活動を行う場を設定するということについて

子どもは、本来、意欲的である。それは、多様な学習活動をさせればよくわかる。

例えば、土器づくり・博物館などの見学・図書室での調べ学習など、目を輝かせて生き生きと活動する姿が見られる。

したがって、多様な学習活動を授業過程の中に取り入れれば、子どもの学習意欲を高めることができるのである。

このような学習活動として、次のようなものが効果的であると考える。⁸⁾

a. 作業的活動

- ・ 製作する活動（年表作りなど）
- ・ 構成化する活動（実物に似せた模型作りなど）
- ・ 図表化する活動（調査資料、統計資料など）
- ・ 文章化する活動（見学、観察、調査、聞き取りなどをもと

に）

- ・ シート化する活動（学習の流れ、重要ポイントなど）
- ・ ノート化する活動（自分の予想、思い、考え、学習のまとめなど）
- b. 見学、観察、調査、聞き取り活動
- c. 身体的活動
 - ・ ごっこ活動
 - ・ 模倣活動
 - ・ 疑似体験活動
 - ・ 劇化活動
- d. 資料の収集、整理、読み取り、利用活動
- e. 話し合い、発表活動
- f. 視聴覚機器の利用
 - ・ 写真、VTR、テレビ、ラジオ、スライド、OHP、映画など

以上のような学習活動を、授業過程の中に取り入れることにより、子どもの学習意欲を高めることができているのである。

子どもが多様な学習活動をしている一例として、アメリカ合衆国ミズーリ州コロンビア市（松任市の姉妹都市）の市長さんと子どもたちが交流している写真を以下に掲載する。



写真1. コロンビア市長との交流

第6学年としては、これらの学習活動の中でも、特に「e. 話し合い活動」を重要視したい。

第6学年は、小学校の最終学年であることか

ら、私は、第6学年の目標として「互いに認め合い助け合いながら向上していく」ということを考えている。

この目標を達成するためには、話し合い活動が重要である。相手を意識して話したり聞いたりすることや、そのことを通して自分の成長が実感できることなど、話し合い活動によって様々な効果が期待できる。何よりも話し合い活動が楽しくなり、学習意欲が高まっていくことにつながっていくことが、この学習活動を重要視する理由である。

そのためには、話し合い活動を授業過程の中に取り入れると共に、子どもが話し合い活動を効果的に行えるように指導することが大切であると考えている。このことに関しては後述する。

⑤ 学習のまとめとしての表現の場を設定するということについて

「④多様な学習活動」とも関連することであるが、ここでは特に学習のまとめとしての表現活動を取り上げたい。

社会科の表現活動には、次のようなものがある。

- a. わかったことや考えたことなどを口頭で発表する。
- b. わかったことや考えたことなどをノートに絵・図・表・グラフ・文字などでかく。
- c. わかったことや考えたことなどをTPシートに絵・図・表・グラフ・文字などでかき、スクリーンに映し出す。
- d. わかったことや考えたことなどを模造紙に絵・図・表・グラフ・文字などでかき掲示板に貼る。
- e. わかったことや考えたことなどを新聞で表す。
- f. わかったことや考えたことなどをイラストで表す。

これらのいずれも学習のまとめとして表現させても十分な活動ができると思う。私自身、以

前に、「学習日記」というものを書かせたり、「新聞作り」をさせたりなどしてきた。

しかし、私は、これらの中で、特に「f. イラスト」に注目したい。それは、次の理由からである。

- a. 子どもの個性が表れる。
- b. 子どもが社会的事象をどのようにイメージしたかがわかる。
- c. 子どもの社会的思考力を育てることができる。
- d. 暗記型の社会科授業から抜け出し作業型の考える社会科授業に変容できる。
- e. 子どもの学習意欲を高めることができる。

「学習日記」や「新聞作り」でも、子どもは学習を通して、わかったことや考えたことなどを一人ひとりの個性的な表現の仕方でも表してきた。いずれも有効な方法であると考えている。

「イラスト」をかかせるようにしたのは、さらに効果的な方法であると考えているからである。

「イラスト」では、上記のように、一人ひとりの子どもが社会的事象をどのようにイメージしたか、どう考えたかを個性的に表現することができる。このことは、習ったことを一律にただ暗記すればよいという社会科から、一人ひとりが社会事象について考える社会科に変容することを意味している。この考える社会科であることが、子どもの学習意欲を高めていくと考えるのである。

ところで、子どもがかく「イラスト」を形態で分類すると次のようになる。⁹⁾

- a. スケッチのイラスト
- b. 比喩的イラスト
- c. 地図的イラスト
- d. 象徴的イラスト
- e. 構造的イラスト
- f. 抽象的イラスト

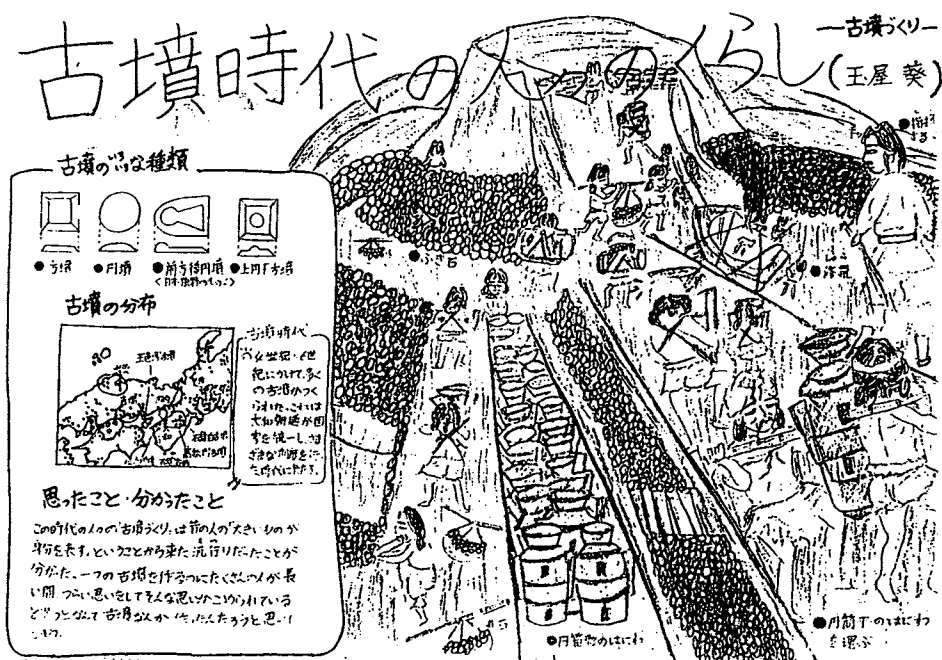


図1 子どもがかいたイラスト

子どもの社会的思考力を高めることを考えると、「d. 象徴的イラスト」「e. 構造的イラスト」「f. 抽象的イラスト」をかかせるようにすべきであると考えますが、最初からそのようなイラストをかかせることは困難であると考えます。

最初は「a. スケッチ的イラスト」からかかせ、社会的事象をどのようにイメージしたかがわかるようにすることが大切であると考えます。そして、次第に、より思考力を高める方向で、「d. 象徴的イラスト」「e. 構造的イラスト」「f. 抽象的イラスト」をかかせるようにしたいと考えます。

図1のイラストは、子どもがかいたものである。まだ、「スケッチ的なイラスト」の域を脱していないが、この段階における子どもなりのイメージや思いは表されていると思う。

このように、段階を踏みながらイラストをかかせ、子どもの社会的思考力を育成し、学習意欲を高めようと試みている。

学習のまとめとしてイラストをかかせること

で、教師自身の指導の反省にも大いに役立つものと考えます。

(3) 子どもが学習の仕方を身につけるような指導を行うということについて

これまでの私は、どちらかというと、どのような教材で、どのような授業過程にすればよいのか、ということに意識が偏りすぎていたように思う。子どもの実態に合わせて教材や授業過程を考えることは基本的なことであり、そうすべきであることは言うまでもないことである。しかし、それだけでは子どもは育たない。

例えば、6年生になると授業中に発言する子が限定されてくる傾向がある。低学年のときは活発に発言していたのに、学年が上がっていくにつれ、発言が少なく、しかも同じような子どもの発言に限られてくるのである。

ところが、6年生でも白熱した討論を行っている学級も存在している。

この違いはどこからくるのであろうか。私は

子どもが学習の仕方を身につけているかどうかの違いが大きいと考えている。¹⁰⁾

では、どのような指導をすれば、子どもは学習の仕方を身につけるのであろうか。

このことに関して、私の考えを述べる前に、どのような学習の型を身につければよいかということについて述べたい。

前述したように、第6学年は、小学校の最終学年であり、「互いに認め合い、助け合いながら、向上していく」ことが目標であると考えている。そのための授業形態としてふさわしいのは、学級全体で話し合いながら問題解決にあたる「問題解決的な学習」であるとする。

つまり、「問題解決的な学習」を行える力を身につけることが大切なのである。その基礎となる力を、次のようなものと考えている。¹¹⁾

- ①話す力 ②書く力 ③聞く力 ④見る力
⑤調べる力 ⑥考える力 ⑦判断する力

これらの力を総合して行われるのが「問題解決的な学習」なのである。そのためには、「話し合う力」を身につけなければならない。「話し合う」ことによって、①～⑦の力が総合的に活用されるのである。

このように考えると、「学習の仕方を身につける」ということは、ここでは「話し合う力を身につける」ということなのである。

「話し合う」ためには、まず、話さなければならない。話すためには、話す内容を持たねばならない。話す内容を持つためには、見たり、聞いたり、調べたりしなければならない。次に、自分が一方的に話すだけではなく、相手の話を聞かなければならない。その後で、自分の考えと相手の考えを比べ、同じ考えか違う考えかなど何らかの判断を下さなければならない。

このように、上記の①～⑦の力を総合した学習が「問題解決的な学習」なのである。

①～⑦の力は「問題解決的な学習」の基礎的な力であるが、「問題解決的な学習」を行う前

提としての力であるだけではなく、「問題解決的な学習」を行う中で身につけていく力でもあることを付け加えておく。

では、どのようにすれば、このような「学習の仕方」を身につけることができるのであろうか。

私は、まず、学習の一番の基礎である「①話す力」「②書く力」「③聞く力」の3つの力が身につくように年間計画を立て、月毎に重点目標をおいて、段階的に指導していくことにした。次に、1時間の授業の流れを「問題解決的な学習」を行えるようにパターン化して、繰り返し指導していくことにした。そして、その他に、子どもたちが「話し合い」を行ないやすいように、「AかB」という二者択一の学習問題を設定するというものも行うことにしたのである。

① 年間指導計画¹²⁾

月	話 す 力	書 く 力	聞 く 力
四	・大きな声で話す	・学習問題をノートに書く	・話し手の目を見て聞く
五	・結論から話す	・自分の考えをノートに書く	・結論を落とさずに聞く
六	・語尾をはっきりと話す	・自他の考えの違いをノートに書く	・自分の考えと比べて聞く
七	・考えの根拠を話す	・自分の考えの筋道がわかるように書く	・根拠が言える聞き方をする
九	・聞き手の反応を意識しながら話す	・わかったことと考えたことを区別して書く	・反応しなから聞く
十	・句点をつけて話す	・話し手の考えを聞きながら要点をメモする	・いくつかの考えが出されたかを意識しながら聞く

月	話す力	書く力	聞く力
十一	・主語・述語をはっきりさせて話す	・絵や図を交えた文章を書く	・経験や既習とつなげ聞く
十二	・自分の考えの根拠になる事柄をわかりやすく話す	・自分の考えの根拠を整理して書く	・わかりにくいときは聞きかえすというかまえて聞く
一	・何を学んだかがわかるようにはっきりと話す	・何を学んだかがわかるように書く	・要点を鋭く聞き取る
二	・自分の考えがどう変わったか、何が深まったかを話す	・自分の考えの変化や深まりがわかるように書く	・学びとったことや解決したことをつなげて聞く
三	・話すことを楽しむ	・長文で作文を書く	・受容的態度で最後まで集中して聞く

この年間計画は、学習の基礎である「話す力」「書く力」「聞く力」の3つの力について毎月に重点目標を立てて、段階的に指導するようにしたものである。学級全員がそれぞれの目標を達成することは難しいと考えたが、一人でも多くの子がこれらの力を身につけ、互いに切磋琢磨しながら成長していった欲しいと思って計画した。

② 1時間の授業の流れ

昨年度は図2のような「授業の流れ」を全員に配布し説明した。また、教室の正面左に掲示し、いつでも見るようにした。

このことによって、子どもは、司会者と書記をそれぞれ一名ずつ立てて（一日交代の当番制）自分たちで授業をすることができるようになった。

授業の流れ		
学習のめあてづくり (5～10分)	・前の時間のよりかえりをする ・今の時間のめあてをもつ ・疑問を見つける ・見つけた疑問を問題のかたちにしてみる ・「学習問題をつくる」	・前の時間のまとめを発表する ・資料などをよく見る ・学習問題をノートに書く
学習の足場づくり (5～10分)	・自分の考えをもつ ・自分でやってみる ・となりの人と相談することもある	・考えをノートに書く
学習のねりあげ (20～30分)	・自分の考えを道んで発表する ・友だちの考えと同じところ、ちがうところを聞きわけ ・なぜちがうのかを考え、ちがう理由をさがす ・自分の見方・考え方を考えてみる	・大きな声で考えを発表し広める ・よく聞く(はしむきこむ) ・よく考える(資料を見てもいい) ・考えをより深める
学習のまとめ (5～10分)	・わかったこと・できたことなどを発表する ・わかったこと・できたことのほか、 ・もっとやってみたいこと ・もう少しわしく知りたいこと ・疑問に思ったこと などをノートに書く	・道んで発表する ・自分の思いを入れてノートに書く

図2

このことは、卒業文集の中に「自分たちだけで授業をした」ことを6年生の思い出として書いた子どもがいたほどで、自信につながったようである。

今年度も引き続き同様の方針で行っている。今年度の子どもも昨年度と同様に一人でも多くの子どもが学習の仕方を身につけるようになって欲しいものである。

③ 二者択一の学習問題¹⁹⁾

「話し合う力」をつけるためには、話しやすい学習問題であった方がよい。その方がより多くの子どもの発表が期待できるからである。

次に例示した「金閣寺と銀閣寺」の実践は〈金閣寺と銀閣寺のどちらに住みたいか〉という二者択一が学習問題になっており、子どもにとって話しやすくなっている。

図4の授業記録からもわかるように、子どもは、教師があまり発問しなくても、どんどん自分の考えを述べている。子どもは、このような学習によって「話し合う力」を少しずつ身につけていくのである。

6年1組社会科学習指導略案

1992. 7. 17 (金)
指導者 本蔵 毅

1. 題 目 金閣寺と銀閣寺
2. ねらい 金閣寺と銀閣寺のつくりを比べることによって、現代に受け継がれている東山文化の良さに気付くことができる。

3. 学習の流れ

学習活動	児童の意識の流れ	指導上の留意点
1. 本時のめあてをつかむ (5)	<金閣寺と銀閣寺のどちらに住みたいか>	金閣寺と銀閣寺の写真を並べて提示する
2. 本時のめあてについて話し合う (25)	《金閣寺》 ・金ピカできれい ・豪華 ・大きい ・広い ・三層建 《銀閣寺》 ・落ち着いた ・畳み、障子 ・今の家に似ている ・日本風	金閣寺と答える子が多いと予想するが、深く考えていないと思われるので、金閣寺と答えた子から理由を述べさせる
3. 深める (10)	①考えが変わった人 (ほとんどの子が銀閣寺にかわる) ②私達の先祖はどちらの建て方を選んだか ・銀閣寺 ・今でも畳みや障子は使われている ③この時代にできて今でもあるものは何か ・生け花 ・お茶 ・能	現実的な答えをした銀閣寺の方に考えが変わるはずと予想する 銀閣寺の建て方が今に受け継がれていることに気付かせる そのほかに今に受け継がれているものを見附させる
4. まとめる (5)	落ち着いた住みやすい銀閣寺の書院造の方が今に受け継がれているそのほか、お茶など、この時代に今に受け継がれている文化がいくつも生まれている	イラストでまとめさせる

図 3

社会科授業自己評価

「金閣寺と銀閣寺」 1992. 7. 17 (金) 2限
授業者 本蔵 毅

教師の発問	児童の反応
金閣寺と銀閣寺のどちらに住みたいですか。	金閣寺です。(19人)
どちらかに選んで	どっちとも住みたいです。 うーん、じゃ、銀閣寺 銀閣寺です。(10人)
それぞれ、私は、どちらに住みたいか、わけは、一です。とノートに書いて下さい。	
時間は？ (5分後)	5分
金閣寺の方から聞きます。金閣寺に住みたいと思った人。	金閣寺に住みたいわけは、なんか大きくて、きれいな池があるし、見晴らしがよさそうで、なんだか、見た感じ、いこちがよさそうだからです。それに、3階建てだから、一番上に上れたら、すごくいい景色が見渡せそうで、風通しもよさそうな家だから、住んだら、すごく気持ちがいいと思って選びました。
	まわりに大きな池があってきれいだからです。
	銀閣寺より、金閣寺の方がきれいだからです。それに、銀閣寺にも池があるけど、金閣寺の方が大きいからです。
	金閣寺に住みたいわけは、金ばくがはってあってきれいで、光っているし、3階建てで大きいからです。
	金閣寺はきれいで楽しそうだからです。
	金閣寺は寝殿造で、今の家とちがうから、一回住んでみたいと思ったからです。
	金閣寺は、金ばくがはってあって、きれいだし前に池があるからです。
	金閣寺は、広いし、緑がいっぱいあって、澄んだら、楽しんだりできるからです。

では、銀閣寺にいかがかな。

- 意味がないってどういう意味ですか。
- どういうのがいいの？
- 金閣寺は×だから、銀閣寺がいいというのだね。

金閣寺は、見晴らしがよさそうで、今の家とちがっているの、一回住んでみたいんです。

金閣寺は、ピカピカ光っていて、金ばくがはってあるから、お金持ちになった気分になるから一回住んでみたいんです。

銀閣寺は静かそうでいいと思いました。

金閣寺みたいに金ピカの豪華なもので、銀閣寺にしました。

銀閣寺の方で、わけは、金閣寺は金ばくがたくさあって意味がないと思って、銀閣寺にしました。

金ばくはってるとくすることがないということです。

静かなのがいいです。

私は、銀閣寺に住みたいです。わけは、金閣寺は、金ピカが目立つし、銀閣寺は、今の家みたいだからです。

僕も、銀閣寺で、わけは、金閣寺は、金持ちになった気分になれるけど、足利義満みたいに、欲張りになるし、銀閣寺のようにのんびりした方がいいから、銀閣寺の方にしました。

私も、銀閣寺で、金閣寺は、目立ちすぎて、ちょっと広すぎて、広すぎてあれだから、銀閣寺にして、それと、金閣寺だと、金ばくがはがれそうで、修理するのにお金がかかりそうで、銀閣寺にしました。

私は、銀閣寺に住みたいです。金閣寺だと、中は光ってないと思うけど、まあいいし、まわりの人に迷惑だし、観光客が入ってたら困るからです。銀閣寺のいいところは、普通の家みたいに日本的で、だけど、3階建てならいいの、にと思いました。

僕は、銀閣寺に住みたいです。わけは、4つあって、金閣寺みたいに華やかすぎて、華やかにくらしすぎて、寿命が短いのはいやだし、二つ目は、金ばくがはってあるので、泥棒が入るから困るというのと、3つ目が、銀閣寺みたいに今でもある「ふすま」や「障子」など、暑気払いがいいからです。4つ目は、銀閣寺はひっそりとしていて、日本風の別荘みたいでいいからです。

今ね、銀閣寺の方、言ってくれ人、金閣寺のためなところも言ってくれたね。逆に金閣寺の人たち、銀閣寺が×というところない？

銀閣寺は、木いっぱい使ってると思うし、なんか用障ったらくさそうだから、銀閣寺は、すぐくさそうだから、金閣寺にしました。

金閣寺も木でつくってあるし、どっちにしろくさるのは関係ないと思います。

ちょっとつけたしで、金閣寺も銀閣寺みたいにもとは、金に金ばくをはっただけだから、同じだと思えます。

金閣寺は金ばくがはってあるから、金ばくがとれるんじゃないですか。

銀閣寺は木でできているけど、金閣寺も木に金ばくをはってあるから、すぐにとれそうだから同じだと思えます。

金閣寺は田が隣たら、おそろ金ばくが落ちそうだから、どっちもそうだと思います。

金閣寺は、今までも金ばくがとれなかったのだから、これからとれないと思います。

(以下省略)

図 4

Ⅲ. 授業の実際

第6学年社会科学学習指導案

平成5年1月23日(土) 5限

指導者 松任小学校 本 蔵 毅

1. 単 元 名 アメリカ合衆国コロンビア市の人々の暮らし

2. 目 標
- ・松任市の姉妹都市であるコロンビア市の人々の暮らしを調べる学習を通して外国の人々の暮らしに関心をもつことができるようにする。
 - ・コロンビア市の人々の暮らしを調べながら、自分たちの暮らしと違う所や共通する所に気づき、外国の人々と協調し合っていくことの大切さを自分なりの見方・考え方でとらえていくことができるようにする。

3. 指導にあたって

(1) 教 材 観

コロンビア市は松任市の姉妹都市であり、互いの中学生をホームステイ交流させている。そのため、比較的情報は得やすい。例えば、ホームステイ交流記により、コロンビア市の人々は生野菜をよく食べていることや家には地下室があることがわかる。

これらの事柄を、単元の中に位置付けることにより、くらしぶりは違っていても、よりよくくらしたいと願う気持ちは同じなのだということに気づかせたい。そして、これらのことを通して、コロンビア市の人々と協調しようとする気持ちをもつような学習をしていきたい。

(2) 児 童 観

子どもたちは、第4学年の時に、コロンビア市の先生と給食をいっしょに食べたことがあり、本学年の1学期にはコロンビア市の大学の先生が授業を参観していったという経験をもっている。また、中学生がホームステイ交流をしているという情報を耳にしており、姉妹都市として外国の他の都市より身近に感じているようである。

しかしながら、コロンビア市についての知識に乏しく、どんな所なのかほとんどイメージできないという実態である。したがって、興味・関心をもちながら、コロンビア市について調べていけるような単元にしたい。

(3) 指 導 観

本単元では、子どもに学習意欲をもたせ、学習対象を近づけることを目的に、アメリカ人英語講師の方とのふれあいの時間を設けている。さらに、中学生のホームステイ交流記などを利用し、コロンビア市の生活を体験した人の目を通してコロンビア市の人々の暮らしを知ることができるように単元を構成している。これは、人とのかわわりを大切にしたいと考えているからである。

また、松任市の姉妹都市であるコロンビア市を取り上げたのは、地域にある素材を教材として開発することによって、遠い外国のことであっても身近なこととして感じるとともに、より具体的に調べることができるものと考えたからである。

本単元では、これらの利点をふまえた学習を展開していきたいと考えている。

4. 指導計画（総時数 8 時限＋課外）

次	主な意識の流れ	次	主な意識の流れ
一次 広 く て 大 き な 国 ア メ リ カ 2	<p>〈アメリカのものにどんなものがあるか〉</p> <ul style="list-style-type: none">・ Gパン、コーラ、など <p>〈アメリカってどんなところか〉</p> <ul style="list-style-type: none">・ 広くて大きな国・ 大きな車がたくさん走っている <div>日本とアメリカはかかわりが深い</div> <p>〈アメリカの方の話を聞こう〉</p> <ul style="list-style-type: none">・ アメリカはとても広い・ 物価が安い・ 学校では制服は着ない <div>日本とアメリカは随分ちがうな</div>	コ ロ ン ビ ア 市 の 人 々 の く ら し 4	<p>〈コロンビア市の人々の夕食を見てみよう〉</p> <ul style="list-style-type: none">・ 生野菜が多い・ お祈りしてから食べる・ みんなで用意しみんなで片づける <div>コロンビア市の夕食は簡単に作ってあるが、この夕食には家族を大事にする思いがこめられている</div> <p>〈コロンビア市の人々はどんな家に住んでいるのか〉</p> <ul style="list-style-type: none">・ 平屋建だが地下室がある・ 地下室は夏涼しく冬暖かい <div>コロンビア市の人々は広い土地に気候にあわせて地下室のある家に住んでいる</div>
	二次		<p>〈コロンビア市はどんなところか〉</p> <ul style="list-style-type: none">・ 人口68,000人（松任市60,000人）・ 広い公園がある <div>コロンビア市は森や公園などがあって住みやすそうなおとこだ</div> <p>〈コロンビア市の人々はどんなくらしをしているのか〉</p> <ul style="list-style-type: none">・ 広い土地にくらしている・ くつのまま家の中に入る <div>コロンビア市の人々はくつのまま家にあるなどちがうくらしをしているようだ</div>

5. 本時の学習（第2次中3時）

- (1) 題 目 コロンビア市の人々の食生活
- (2) ね ら い ・コロンビア市の人々の食事のようすを調べ、日本のファーストフードのような食べ物や生野菜がとても多いことなど自分たちの食生活との違いに気づき、その違いを認めようとする。
- (3) 展 開

学 習 活 動	時	児 童 の 思 考 の 流 れ	教師の働きかけ
1. コロンビア市の夕食を見て日本の夕食との違いを話し合う	15	<p>〈コロンビア市の人々の夕食を見てみよう〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ごはんがない ・たくさんもってある（4人分） ・夕食なのにコーラを飲む ・野菜は生だ マッシュルームまで生だ ・おやつみたいで、うらやましいな ・かんたんだな あきないかな 	<ul style="list-style-type: none"> ・コロンビア市のある家の夕食を再現したものを見せる ・日本の夕食と比べてみる ・4日分の献立を補足して見せる
2. コロンビア市の人々の食事の仕方を知り自分たちとの違いについて話し合う	10	<p>〈食事の仕方を見てみよう〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・お祈りをしてから感謝して食べる ・食事を大事にしているのだな ・家族みんなそろって夕食を食べる ・「用意5分片付け5分」 ・家族みんなで用意しみんなで片付ける ・お父さんは会社から夕食のために帰って来て夕食が終わるとまた会社へ行く ・家族を大事にしているのだな 	<ul style="list-style-type: none"> ・中学生のホームステイ交流記を利用する ・ホームステイした人の話として伝える
3. コロンビア市の人々の食事について感想を話し合う	15	<p>〈コロンビア市の人々の食事についてどう思うか〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・みんなで用意するからすぐできるのだな ・簡単に作ってあるけどみんなで食べるからおいしいのではないか 	<ul style="list-style-type: none"> ・ノートに書かせてから発表させる ・中学生の感想を紹介する
4. コロンビア市の人々の食生活についてまとめる	5	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>コロンビア市の人々の食事は日本人の食事とはちがって簡単に作ってあるが、この食事の中にはコロンビア市の人々の家族を大事にする思いがこめられているのだ。</p> </div>	<ul style="list-style-type: none"> ・コロンビア市の人々の考え方にもふれたまとめを書かせたいと思う

6. 授業記録

：
〈コロンビアの人々はどんなものを食べているのか〉

T. 先生がむこうの料理を作りましたので見て下さい。

C. えっ、ウソ！？（ざわめく）

（コロンビア市の料理を出す）

T. 見にくかったら、見に来ていいよ。

（全員前へ出て来る）

T. よかったらもどっていいよ。

T. これは夕食です。

C. ええ～っ！？

T. 自分たちの夕食とくらべてみて、気づいたこと書いてくれるかな？

T. 時間はどれくらい？

C. 3分くらい

T. では、3分間、ノートに書きなさい。

（机間巡視をする）

T. 時間だけど、いいかな？

T. 途中で止めて下さい。

C. ごはんでなくて、パンを食べています。

C. 僕たちの朝食や昼食みたいです。

C. 私たちは夕食にお茶を飲むけど、コーラは飲みません。

C. コロンビアの人はパンなど、簡単な食べ物を食べています。

C. お皿の数が日本と比べて少ないです。

C. 日本と比べると、量が少ないです。

C. 日本では朝食に出ます。コーラも飲みません。

C. 僕たちは野菜は料理して食べるけど、コロンビアの人はほとんど生で食べます。

C. 生野菜が多くて、品数が少ないです。

日本はもっと数が多いです。

C. 日本と比べて、野菜をただ切っただけという感じがします。

C. 私も同じで、日本と比べて野菜などが多いです。

：

（板書）

〈コロンビアの人はどんなものを食べているのか〉

なかみ

さっぱりあっさり

—— バイキング洋食 ——

- ・パン、コーラ おつゆがない
- ・朝食みたい
- ・かんたん 手ぬき
- ・皿の数が少ない
- ・量少ない 種類少ない
- ・生野菜多い
- ・味つけてない（自分でつける）

食べ方

食べることに感謝

- ・お祈り
- ・みんなで手をつないで歌う
- ・みんなで用意
- ・学校であったことを話す
- ・夕食のために帰ってくる

協力

助け合って
生きている
家族を
大切に

この授業では結局、学級全員が発表した。授業記録にもあるように、驚きの声も上っている。興味・関心を持ちながら、最後まで意欲的に学習していったのである。3学期の授業であり、1年間にどれだけの力が身についたかが試される授業であったが、子どもは持っている力を十分発揮したものとする。

IV. 研究の成果と今後の課題

1. 研究の成果

本研究は、子どもの学習意欲を高めるための指導方法を求めて、次の3つの仮説からスタートした。

- (1) 子どもがおもしろいと思う教材を開発する
- (2) 子どもの意識が持続するように授業過程を工夫する
- (3) 子どもが学習の仕方を身につけるような指導を行う

この3つの仮説について考え、授業実践をしていく中で(1)～(3)のそれぞれについて、次のことが明らかになった。

- (1) 子どもがおもしろいと思う教材を開発するとき、次の3つの観点で行えばよい。
 - ① 意外性があるもの

② 新しい発見があるもの

③ 拮抗があるもの

(2) 子どもの意欲が持続するようにするには、次の3点に注目するとよい。

① 導入で意欲づける「モノ」

② 問題と問題をつなぐ単元構成

③ まとめとしてのイラスト

(3) 子どもが学習の仕方を身につけるようにするには、次の3点が重要である。

① 段階指導を行う

② やり方を示し繰り返し指導する

③ 二者択一の学習問題で発言量を増す

以上が明らかになったばかりではなく、何と言っても、子どもが意欲的に学習していくようになったことが、一番の成果である。

2. 今後の課題

「アメリカ合衆国コロンビア市の人々の暮らし」の実践からもわかるように子どもは、意欲的に学習し、話したり書いたりする量は増えたが、質的にはまだまだ不十分で、一人ひとりが、社会的事象に意味づけしていくように、深い思考をするまでには至っていない。

そのような子どもに育つためには、まず、学習問題を自分のこととしてとらえる強い問題意識を持つことが必要である。次に、話し合いの場においては、相手の意見と自分の考えをからませた発言をもっと多くするようにならなければならない。

したがって、次の2点が今後の課題である。

(1) 強い問題意識を持たせるにはどうすればよいか。

(2) 発言がからみ合い思考が深められていくようにするにはどうすればよいか。

補 足

平成4年度、5年度と連続して6年の担任となったため、本研究は、平成4年4月から継続しているものである。そのため、実践例はほとんどが昨年度のものであるが、イラストは本年度の子どもがかいたものである。また、年間計画は本年度に入って修正したため、本年度のものを記載したことを補足する。

参考文献・脚注

- 1) 奥田真丈：小学校新しい評価観と指導要録記入の実際，教育出版，4.，1991
- 2) 中野重人：小学校学習指導要領の展開 社会編，明治図書，12.，1989
- 3) 有田和正：学習意欲の高め方，明治図書，11.，1984
- 4) 石川県小学校社会科教育研究会：生きる力を育てる社会科指導の工夫，平成4年度研究紀要，46-49.，1993
- 5) 石川県小学校社会科教育研究会：生きる力を育てる社会科指導の工夫，平成2年度研究紀要，42-45.，1991
- 6) 有田和正：有田学級で育つ学習技能，明治図書，50.，1991
 ＊(4)～(6)の教材は上記の文献を参考に，筆者が指導案を立て実践したものである。
- 7) ①前掲3)，56-60。
 ②筑波大学附属小学校社会科教育研究部：社会科・楽しい授業の創造，図書文化，10-24.，1985，
 ③筑波大学附属小学校：社会科「学ぶ力」を育てる授業づくり，明治図書，13.，1990
- 8) 前掲2)，218-219
- 9) 北 俊夫：イラストを取り入れた社会科授業。社会科教育全書31，明治図書，52-62.，1986
- 10) 前掲7)②，28.
- 11) 有田和正：思考力・判断力を育てる，教育科学社会科教育2，明治図書，113.，1988
- 12) 落合幸子：「筑波学級の年間指導計画」，講演会資料4，1992.8
- 13) 石黒 修：討論の授業入門，明治図書，160.，1989